神谷： びたいな、近所の子と遊ばせたいなっていう気になれる。そんなおじいちゃん、おばあちゃんたち、シニア世代の方たちのいる町の中で、子どもが育っていく環境があったらいいと思っています。なので、私たち世代にとって、シニア世代の方たちの子育て支援は大歓迎です。

漁田： ありがとうございました。この二人から行政支援してほしいねという声が聞かれました。で、行政の子育て支援課といえば磐田市の鈴木さんだろうということで、お話を伺いたいと思います。

鈴木： はい、磐田市の子育て支援課の鈴木と申します。先ほど楽屋でかなりお二人から期待を持たれたというか、きついお言葉をいただいて、どうつなごうかなと苦労していますが、行政の立場と実際自分が子育てをする地域で暮らしていて感じたことに、ちょっと触れさせていただきたいと思います。

まず支援という言葉が山のように出てきました。支援ってなんだろうっていうのを常々考えるわけなんですね。行政ががっちり支援してしまう、その人をがっちり支えてあげちゃうということは、その人の自立につながらないんですね。一般的には、寄り添うという言葉を皆さん使われています。私は、倒れ掛かった方を支えてあげる、悩んでいる人の背中をぽんと押してあげる、それが支援かなと思います。それをやるのが行政の役割かなと考えています。皆様からは物足りないと思われるかもしれませんが、そういう視点で聞いていただければと思います。

私は子育て支援課で係長をさせていただいておりまして、主な業務では、一番大きいのが児童虐待に対応しています。その他、子育て支援センター、つどいの広場などの拠点事業、児童館っていうのもありますね。それと、相談業務。島田市の染谷さんがいらっしゃいますけども、島田市さんから教わって、子育て相談員派遣事業というのを無料で実施をしています。これはどんなものかというと、生後間もない赤ちゃんのいる家庭に出向いていって、無料で夜中にも相談を受けたり、子どもの介助をする、そういうちっぽけなところからいろいろな悩みを聞いてあげて、お母さんの気持ちに例えれば、コップ一杯になった水をちょっとこぼしてあげる。そして少しでも受け入れるスペースをつくってあげる、そういうことができないかなぁと思っています。

虐待業務を例に出させていただくと、ついこの間ですね、虐待をしていると思われる家庭へ児童相談所と一緒に出向きました。結果としてお子さんをお母さんから引き離しました。母子家庭の方でした。部屋に入ったときの母さんの表情、どんな表情だったと思います？追いかけて、逃げ回っていた犯人が警察に捕まった瞬間のほっとしたような表情です。普通は、反抗的に「私はしてないわよ」みたいなことを言うんですが、ほっとした表情を浮かべて、「来てくれてよかった、このままいったら子どもを殺していたかもしれない」と、もう心にグサッと来ましたね。結果として、そのお母さんとお子さんは分離をして、今お子さんは施設にいらっしゃいます。元気ですごしています。この二人を引き離すことは簡単なんですが、元の鞘に戻してあげる、いい環境で出会わせてあげる、そして将来に向かって進んでいただく、そういう仕事を私はいましています。

そこで一番感じたのは、やはり相談業務の充実ということですね。私がやっている仕事の中で、子育て支援センターがあるんですが、そういうところでの相談機能の充実をはかっています。各地域に公会堂や公民館がどこの町にもあると思うんですね。ところが、なかなか支援センターへ出向く勇気というのもないですし、なかなかくるきっかけもない。そこで考えたのが、一つの例として出前子育て支援センター。デリバリーで子育て支援センターを運んじゃいましょうということなんですね。2月に本当にうれしい話なんですが、ヤマハさんから寄付をいただきました。県の補助金もいただいて、ペイントしてかわいく車を作りました。かわいい車におもちゃをたっぷり詰め込んで、地域の公民館に出向いていく。高齢者サロンと連携をはかる。そういう事業を拡大しようと思っています。来年度は40回を予定しています。そこで地域のボランティアの方や高齢者の方とのコミュニケーションをとっていくわけなんですが、今までやってきた中で出た感想が、「地域の方と交流ができてよかった」これはお母さんの感想、「地域活動に参加しやすくなった」そういう言葉を聞きます。また「同世代の仲間ができた、メルアドも交換できたよ」友達づくりができたということですね。それで、「子育てに悩んでいるのは自分だけじゃない、みんな同じ悩みを抱えているんだ」そういうような叫び声も聞こえました。そんなときにおばあちゃんやおじいちゃんに優しい言葉をかけていただいてほっとした、これからまたそのおばあちゃんのところに相談しに行くよみたいな関係ができていく、これが今お二人から言われていた地域づくりと声掛け、そういうものの発展系じゃないかと思います。ですので、今日のテーマにもありますけども、地域のシニアの皆さんは活動したいかというか、「生きる場所」、そういうものを探していらっしゃるんじゃないかなと思うんですね。ぜひとも団塊の世代のみなさんに今までの経験されたスキルと子育てで養ったスキルを活かしていただいて、地域で拡大をしていただきたいと思います。

これも違ってたら申し訳ないんですが、私の持論としては、「人を動かすのは、ほんのちょっとのお礼とやりがい」だと思うんですね。あとは、ボランティアやいろいろな活動をされたときの達成感だとか、充実感。そういうものは何ものにも変えがたいものがあるかなと思います。ですので、シニア世代の皆さんに地域にいていただいて、特に静岡県は自治会活動がすごく盛んな地域ですので、そういうところを活かしていただいて、地域でそういうシニアの活動できる場所ができてくればそれが子育て支援につながっていくのかなぁと思います。

NPO法人ポレポレ 事務局長 神谷尚世氏

先ほど楽屋でも話をしたんですが、行政がいろいろな企画を立ち上げるんですよね。今回のシンポジウムも県の主催で立ち上がってますけども、行政が皆さんに「やってくださいよ、お願いしますよ」って旗を振っても、そういうものは補助がなくなった段階でどんどん消えてってしまう。残っているものは何かっていうと、自分たちで立ち上げた、それに対して行政がちょっと支援したもの、もしくは自分たちで立ち上げて、自分たちで補助がなくても動いていく仕組みをつくったものが各地域で根強く生き残っていると思います。ですので、行政が企画して、「やってくださいよ」って言われてやる、やらされ感ではなくて、逆にここにいるお二人のような方が、「私たちこんな活動してるわよ、行政ちょっと支援してね」って僕らがサポートに回る。そういう仕組みができてくれば、よりよいのかなと思います。持論が入った中でまたお怒りを買ったかもしれませんが、それはこの後のディスカッションで真摯に受け止めるということで、よろしくお願いしたいと思います。

漁田： はい、ありがとうございました。次に突然で予定になかったかもしれないんですけど、子育てパパの鈴木光司先生、子育てなさっていた上で、こんなことを誰かが、あるいは行政がしてくれればうれしかったなというようなことがございましたら、何か…。行政でもいいですし、先程の基調講演でお話のあった近所の八百屋のおばちゃんがこういうことしてくれればよかったなでもいいんですけど。

光司： 今聞いてて思ったんですけど、やっぱ褒めるってことが大事かなって気がするんですよ。「あなたのやってること、これでいいんだよ」っていうお墨付きをもらうと、安心できるんですよね。僕も子育てはじめたときっていうのは、特に男だったし、何の知識もないわけです。まったく手探りでやってるんですね。やってみてしくじったら、方向を変えるという、やってみてしくじったらフィードバックしていく。僕は育児書なんて一切読まない。こうあらねばならぬという理想が先にあったんじゃなくて、自分でとにかくやってみた結果、うまくいかなかったら軌道修正することをやりながら自己流というものを完成させてきた。

長女のときのやり方が定着したら、2人目にはこれをまたやればいいだけだから、ものすごい楽だった。3人子どもがいたらもっと楽じゃないかと。4人、めちゃくちゃ楽でしょ。それをね、みんなにアピールしたいんですよ。最初は不安、でも不安を乗り越えるとやり方がわかって2人目超楽じゃないか。さぁ、3人目もいこうぜって感じになって、それを最初の不安のときに解消してくれる人たちが必要なんですよね。そこで褒めてあげたりとか、上の世代の優しい言葉掛けとおっしゃいましたけど、そういったことが自発的な段階から、あるいは行政から、両方からうまく出てくるとすばらしいですね。

磐田市 子育て支援課 鈴木壮一郎氏

漁田： ありがとうございます。なんかすごくわかりやすくなってきましたね。1人目の子育てをシニア世代や周りの人たちが、大丈夫だよ、こうやればいいよっていって不安を解消してあげると、次からはすごく楽と。その大きな役割をシニア世代が担っているようでございますが、ここまで話すともうやってくれるんじゃないかと、支援する側と支援される側ってここでプラスとマイナスみたいに引き付けあうんじゃないかなと思いきや、なかなかそうはいかないという問題点があると思うんですね。そのあたりをもう一回みなさんの経験でなんかありましたら、こういう問題点があるよ、でもこうすればうまくいくよというようなことをお話いただけますか？

神谷： 12、13年前に、今のシニア世代の方が一杯ボランティアグループを立ち上げて、今もずっとやってらっしゃるボランティア団体がすごく多いと思うんです。ただその中に、子育て支援のボランティアが当時からほとんどなかったんですね。今あってもいろんな幅広いボランティアの中でごく少数だと思うんです。それは、何を手伝ってあげたらいいのかわからないよっていうものと、若いお母さんたちに対してどうしてあげたらいいのかわからないよという理由だと思う。

何で子育て支援のニーズを拾えないかっていったら、子どもを育てている期間は、18歳、20歳までですけど、みんなが困る期間というのは5年とか10年なんですね。そうすると5年とか10年のサイクルで困っているお母さん、お父さんのサイクルが入れ替わってしまうので、なかなか継続的にできにくい。これを助けてください、こういうことの支援をお願いしますっていう組織も人もなかなかいないんですね。だから子育ての支援の方たちに助けていただく機会がなかなか少ない。それをどうしていくか、そのニーズをどうやって拾っていくかっていうのは、社会福祉協議会であったり、私たちがやっているNPOとか、行政とかが、その声を拾って形にして、シニア世代に訴えていくということが大事だと思うんですね。

シニア世代のボランティアの育成講座っていうのが、昔からあるにはあるんですけど、それが子育てママのニーズにあっていなかったりするんですね。なので、その昔やってたことをずっとやっても時代は変わりますしママも変わるので、これからのママやパパに合うニーズはどういったことなのか、そしてシニア世代がこんなこともできるよ、こんなこともやってあげられるよっていう支援の力を結びつける中間組織が今弱いと思います。そういうところをもっと頑張っていく必要があると思います。

染谷： 今のつなぎ役、中間組織が必要というお話を聞いて、ここの会場に来てはたと気づいたことがあったんです。私たち「しまだ次世代育成支援ネットワーク」は、自分たちを子育て支援団体だと思っていたんですが、でも支援するだけではなく、その地域で何かできたらお手伝いしたいと思っている人たちを「つないでる」っていうことを今日はっきりと意識させていただいたんですね。神谷さんのお話をうかがいながら。

中心メンバーとなる24人は、さまざまな活動をしています。でも地域の「きしゃぽっぽ」を手伝ってくださっている方々は、その地域の活動日だけ手伝ってくださる。私たちは、何かしたいと思っているシニアの方たちをつないでいける。中間のつなぎ役をするコーディネーターとでもいいましょうか、そういった組織なり人なりがいると、子育て世代、親世代のニーズをシニア世代につないでいけるんですね。シニア世代もやってあげたいと思うことがあるわけですから、双方がうまくドッキングしたときに支援がもっともっと広がっていくのかなと思います。

それからシニア世代の子育て支援は進んでいかない理由に、昔と今の子育ての違いだとか、若いお母さん方との価値観の違いをあげる、そういう声をよく耳にします。もちろんそれは確かです。確かにそうなんだけど、それ以前にシニア世代のほうで、ちょっときっかけがつかめないとか、私何もできないからとか、俺は子育てなんか関係ない、やったことないからとか、そういうネガティブな思い込みが壁になっている。自分にはできないんじゃないかっていう思い込みこそが、最初の一歩を踏み出せない大きな理由になっていると私は常々感じています。

例えば、私の団体も、赤ちゃんを抱っこしたり、直接お母さんたちと接して歌ったり踊ったりする、そういうボランティアもいます。でもそうではなくて、まったく子育ての場には出ないけども、ホームページを管理してくださる方もいれば、駐車場で車の整理をしてくださる方もいます。それから趣味で手品だとかコーラスとかいろんなことをやってる人たちが子育て支援の場に来て、いろいろなパフォーマンスしてくれることで、お母さんたちはゆとりというか癒しの時間をもらっています。ですから、子育て支援って決まりきったものがあるんじゃなくて、自分のできることを探せば必ず何かお役に立てることがみつかると私は思っています。例えば、子育て中の親子を見かけたら、「今日は天気がいいね」「かわいいね」「がんばってるね、いつも見て